

答え合わせ・解説

問1	答え 2 鹿児島県	九州最南端に位置する鹿児島県は、陸地では北東部で宮崎県のみと隣接しています。一方で、桜島や種子島、屋久島、奄美群島など、南北に広がる多くの島々を含んでいるため、海岸線の総延長は全国でも屈指の長さになっています。対照的に長崎県も海岸線は長いですが、佐賀県と接しており、鹿児島県ほどの長さではありません。
問2	答え 1 自然的増加	出生数と死亡数の差によって生じる人口の変動を自然的増減と呼びます。出生数が死亡数を上回れば「自然的増加」、逆であれば「自然的減少」となります。これに対し、進学・就職などの移動による増減は「社会的増減」と呼ばれ、両者を区別して理解することが重要です。
問3	答え 1 稲作の収穫が終わった後の水田を裏作として活用し、小麦などを栽培する二毛作が盛んである。	筑紫平野は九州最大級の平野であり、温暖な気候と豊かな水資源を背景に農業が非常に盛んです。特に、米の収穫後の水田で小麦や大麦を育てる「二毛作」は、土地を1年を通じて有効活用する代表的な手法です。二期作は主に米を2回作ることを指し、促成栽培は宮崎平野などのビニールハウス農業でよく見られる形態であるため、筑紫平野の土地利用の説明としては、裏作での小麦栽培（二毛作）を挙げるのが適切です。
問4	答え 1 九州地方は中国・四国地方に比べて人口が多く、農業生産額も大きいが、工業出荷額は中国・四国地方の方が大きい。	九州地方は人口が約1431万人、農業生産額が約1.9兆円であり、人口約1108万人、農業生産額約0.9兆円の中国・四国地方を上回っています。一方で、工業出荷額に関しては、瀬戸内工業地域などの大規模な重化学工業が発達している中国・四国地方が約36.7兆円となっており、九州地方の約25.7兆円を上回る規模を持っています。地方ごとの産業構造の違いを、人口規模や生産額の具体的な数値から判断することが重要です。
問5	答え 3 年間を通じて温暖であり、特に梅雨の時期にあたる6月から7月の降水量が著しく多い	鹿児島県は低緯度に位置し、周辺を流れる暖流（黒潮）の影響を受けるため、冬でも比較的气温が高い「温暖」な気候が特徴です。また、初夏の時期には梅雨前線が停滞しやすく、南からの暖かく湿った空気が流れ込むため、6月から7月にかけての降水量が他の時期や地域に比べて極めて多くなります。
問6	答え 1 鹿児島県	茶の生産において、かつては静岡県が生産量・生産額ともに圧倒的な首位でしたが、近年は大規模な機械化が進んだ地域が台頭しています。特に、シラス台地などの平坦な土地を利用して効率的な生産を行い、早期収穫が可能な品種（新茶）をいち早く出荷することで、生産額において全国トップクラスに成長したのがこの県の特徴です。
問7	答え 3 対馬	九州と朝鮮半島のほぼ中間に位置しており、その距離の近さから古代より大陸文化流入の要衝となってきました。現在は長崎県に属しています。選択肢にある壱岐は対馬と九州の間に位置し、五島列島は九州の西側に位置する島々です。
問8	答え 4 古くから盛んな鉄鋼などの金属工業を土台として、その材料を利用する自動車などの輸送用機械の生産が近年拡大した。	福岡県の工業は、歴史的に北九州工業地域の鉄鋼業（金属工業）が牽引してきましたが、近年は自動車産業を中心とした輸送用機械（機械工業）の出荷額が急増しています。鉄鋼業という基礎素材産業が近隣に存在することは、重い鋼材を多用する自動車製造業にとっても有利な条件であり、産業間のつながりを持って発展しています。選択肢にあるような化学工業や食料品工業が主役を奪ったという事実はなく、依然として金属と機械が主要な構成要素です。
問9	答え 1 水はけの良さを活かしたサツマイモなどの畑作や、肉用牛・豚などの畜産業	鹿児島県の大半を覆うシラス台地は、水分を保持しにくい性質があるため、水田稲作よりも畑作に適しています。このため、乾燥に強いサツマイモの栽培や、広大な台地を利用した肉用牛・豚・鶏（ブロイラー）などの畜産業が組み合わされ、全国有数の農業地帯となりました。他の選択肢のうち、促成栽培は宮崎平野や高知平野、果樹栽培は愛媛県や和歌山県、大規模な酪農は北海道などで顕著に見られる特色です。
問10	答え 1 福岡県	日清戦争で得た賠償金をもとに、筑豊炭田の石炭と中国大陸から輸入する鉄鉱石の利用に便利な福岡県北部に官営八幡製鉄所が建設されました。これが日本の重工業化をけん引し、北九州工業地帯へと発展しました。
問11	答え 1 高度経済成長が終わりを迎え、それまで激しかった大都市圏への移住者が減少したため。	1970年代に入り高度経済成長が終わりの時期を迎えると、それまで続いていた地方から三大都市圏への大規模な人口流出（移住）が落ち着きました。これに加え、地方における雇用創出の取り組みが実を結んだことで、大分県などの地方都市において人口の増加が見られるようになりました。バブル経済による地価高騰は1980年代後半の出来事であり、時代背景が異なります。
問12	答え 1 促成栽培	宮崎県などの温暖な地域では、冬の暖かさを活かしたり、施設内で温度調節を行ったりすることで、本来の収穫時期よりも早く作物を育てる手法がとられています。これにより、他の地域からの出荷が少ない冬から春にかけて市場に供給することが可能になります。対義的な用語である「抑制栽培」は、高冷地などの冷涼な気候を利用して出荷時期を遅らせる方法を指します。
問13	答え 1 福岡県	福岡県の北九州工業地帯は、高度経済成長期に深刻な公害問題を抱えましたが、市民や企業の努力によって克服しました。その経験から、現在は資源のリサイクルを進める「エコタウン」の取り組みが世界的に評価されており、環境共生型の都市づくりが進められています。